

The Apprentice Blacksmith of Level 596

レベル596の 鍛冶見習い



3

Terao Yuki

寺尾友希

Illustration

うおのめうろこ



◆ ノマド ◆

ノアの父で犬の獣人。『竜王の鍛冶士』という称号を持つ。腕はいいが生活能力が皆無。



◆ ジェラルド ◆

牛の獣人。
デントコーン王国の国王。
ノアにとっては叔父にあたる。



◆ エスティローダ ◆

ノアで遊ぶのがお気に入りの
火竜の女王



◆ セバスチャン ◆

エスティローダに仕える、
物腰柔らかく穏やかだが
火竜最強の執事竜。

◆ 登場人物紹介 ◆

◆ カウラ ◆

羊の獣人。ノアの
イトコで、デントコーン
王国の第一主女。

◆ ユーリティウス ◆

牛の獣人。ノアの
イトコで、デントコーン
王国の第一主父。

◆ リリ ◆

ノアの鍛冶を手伝うため、
一緒に暮らすことになった
風竜の獣人。

◆ ノア ◆

14歳の犬の獣人。
凄腕鍛冶士の父に憧れ、
見習いをやっている。

オイラはノア。鍛冶見習いの十四歳。

オイラの父ちゃんは、「神の鍛冶士」とまで言われた凄腕の鍛冶士だったんだけど……母ちゃんが死んで以来、酒浸りのダメダメ親父になってしまった。

そんな父ちゃんにやる気を出してもらうべく、近所にある魔物の領域『無限の荒野』や『竜の棲む山脈』に行っては珍しい鉱石や鍛冶素材を集めていたオイラは、気が付けば英雄王をも超えるレベル596とかになっていた。

そんな火竜女王にヒイロカネを預けられた父ちゃんとオイラは、全身全霊を傾けて攻撃補整二万超えの武器、【神話級】のバルチザン『金鳥』を打ち上げる。その腕を認められた父ちゃんは、「竜王の鍛冶士」の称号を授けられる託宣を受けた。

それからオイラはエステイに、冒険も鍛冶も出来る「最強の鍛冶見習い」を目指すことを宣言し……それからはまあ、火竜のリムダさんが弟子入りしてきたり、土の妖精ラウルと出会ったりと、いろいろとあった。

そんなある日、魔道具屋のミミイと一緒にコットンシードに出かけたオイラは、ミミイの三つ子の姉であり、風竜の獣人であるリリイと出会う。

成長が遅く、いつまでも幼女にしか見えない彼女は妹ミミイの元旦那ヨヘイさんのお店であるカシワ屋さんに身を寄せていた。そして、どうやら火竜が働くうちの鍛冶場に興味を持ったらしく、

風を操る能力でオイラの鍛冶を手伝ってくれることになった。

そんな折、コットンシードの魔道具屋・赤羽屋が、カシワ屋さんに詐欺を働かれたと冤罪をふっかけてくるという事件が起こる。……まあ、ミミイのおかげですぐに解決したんだけどね。

ともかく、事件が解決したということで、オイラとリリイは我が家に向かって、コットンシードを出発したのだった。

01 リリイとエステイ

「たっだいまー」

数日ぶりの我が家の敷居をまたいだのは、ちょうど昼時だった。

土間から丸見えのコタツに丸まった父ちゃんが、「おう、おかえり」と片手を上げた。鍛冶に没頭すると昼飯も何もすつ飛ばしちゃう父ちゃんだけど、この日は昼前にキリのいいところで上がったらしい。

「リムダさんは？　つてか、仕舞つといたはずなのにこんな時期からコタツ出しちゃったの？」

「リムダなら昼飯を調達しに行ってるぞ」

「自炊はしなかったんだ。良かったー、どうなってるかと心配してたんだ」

胸を撫で下ろしたオイラに、父ちゃんの目が泳ぐ。その視線を辿ると……

「あれ？　羽釜が新しい……？」

「いやあ、なっ、もう古くなってたから、打ち直したんだ。うん」

「つて、エステイの『金鳥』を打ったときに、婆ちゃんたちが新しいの買ってくれたばかりだったよね？　竈も黒いような……？」

父ちゃんが、頬を引きつらせてはっはっはと笑う。

「ま、まあいいじゃねえか。たまには武具以外のモンも打ちたくなっただよ。つてかそれより、久しぶりに帰って来たんだ。荷い降ろしたらどうだ、な？」

「何か誤魔化してる気がするなあ……まあ、それより」

よっこいしょ、と板の間にリュックを置き、軽く被せていた雨ぶたを開けると、父ちゃんもコタツから伸び上がって覗き込む。さては、鉱石か鍛冶素材を期待してるな？

「なんだ、お前がいねえうちに猫が家出しちゃったと思って心配してたが、一緒に連れてつてたのか。言ってけよ。……つて、なんだそりゃあ!?　白い……人形!?　ひょっとして……いや、まさかな」

何故か動揺する父ちゃんに、コテリと首を傾げる。

コットンシードの一件が終わった後。

魔道具士の修業をさせようとするミミイに、リリイを引っ張ったまま一目散に逃げ帰ろうとしたオイラだったけれど、うちで飼ってる猫のタヌキと荷物をカシワ屋に置いてきたことに気付いて、いったん戻った。

竜の血を引くリリイは、動物好きなのに、動物に怖がられて今まで中々近づける機会がなかったらしい。リムダさんと暮らしているおかげで竜に慣れ、物怖じしないタヌキに大喜びだった。

ミミイがあれだけ怖がつていた往路を、タヌキを抱っこしたままキヤイキヤイとはしゃいぎながら飛び回り、『鳥の大湿原』を通る頃にはすっかりエネルギー切れでオイラのリュックの中へと納まった。

リュックに入ってじきにリリイが眠ってしまったので、リリイとタヌキが寝やすいように調整して、日よけに雨ぶたを被せていた。確かに、体を丸めてタヌキを抱き込み、大きなリュックの中で眠っているリリイは、人形のように見える。

「ふあ……」

父ちゃんの大声で目を覚ましたリリイが、小さく睫毛を震わせ、パチリと目を開いた。

「うわマジか!? お前、これ、どこからさらって来やがった!？」

そんな父ちゃんの声をバックに、白い巻き毛がふわりと揺れて、リリイの頭が持ち上がる。

「やだな、人聞きの悪い。勝手にさらって来るはずないじゃないか。風の魔法で、オイラの鍛冶を手伝ってもらおうと思って……」

「あ、ノマド。久しぶり」

「リッ、リリ姐!? やっぱリリ姐かつ!? 何でまたこんなところに。ここにや今……」

妙に焦った父ちゃんに、リリイがコテンと首を傾げる。

父ちゃんとリリイは、どうやら顔見知りのようだった。

まあ、ララ婆の娘だし、冒険者時代に会っていても不思議はないか。

でも、実年齢六十歳とはいえ、見た目六歳のリリイが、父ちゃんを呼び捨てなのは違和感があるなあ。

そんなことを思っていると、チリッ、と背筋が熱くなった。

覚えのあるこの感覚。『無限の荒野』を通ってきたわけだし、これは……

「おお、と暴風が家を揺らし、ギシギシときしんだ梁からは年代物の埃が、砂壁からはパラパラと砂粒が落ちた。

「面白い者を連れて来おったのお、ノア」

振り返った玄関に佇んでいたのは、もちろんオイラの想像通りの人物だった。

迫力満点の紅い髪の美女が、獐猛な笑みを浮かべる。口元にのぞく真珠のような牙、猛々しい皮膜の羽、ウロコに覆われた豪胆さを感じさせる太いしば。艶めく瑠璃のような赤い角。背後には、いつものように黒服の執事竜を従えている。

火竜女王エステイローダは、炎のようなドレスをまとい、光り輝く扇子で、リリイを指し示した。「我が縄張りに、無断で風竜が立ち入った気配がすると思えば……なんじゃこれは? このようなものは初めて見た。人型になれる幼竜じゃと?」

そういえば、人型になれるのは高位竜だけなんだったけ? 竜の中でも一部の竜だけだった話だった。竜は百歳で大人とか言ってたから、まだ子どものリリイが人型なのは、竜からすると、まだ歩けもしない乳児が綱渡りしている、くらいのビックリ案件なのかもしれない。

「縄張りって、『竜の棲む山脈』には行っていないよ？『無限の荒野』を通過して来ただけで……」

ひよっとして『無限の荒野』もエステイの縄張りだったりするのかな？　と思って言ったら、エステイがぶくーっと膨れた。

「ノアの家も私の縄張りなのじゃっ」

そんなエステイを尻目に、すすつ、と音もなく近づいてきたセバスチャンさんが、ヒソヒソと囁く。

「ノアどの。お嬢さまは、『ノアの近くに風竜の気配がするつ、あの陰険な風竜王に目を付けられたなら一大事じゃっ』と駆けつけられたのですよ。つまりは、ノアどのをご心配なさったわけですね」

「余計なことを言うでないっ」

「これは失礼をいたしました」

セバスチャンさんの意外に達者な声真似に目を丸くしていると、エステイが顔を赤らめながら地面を踏んだ。

心配してくれたのは嬉しいけれど、このままだと埃や砂どころじゃなく、天井まで落ちてくる。

「心配してくれてありがとう、エステイ。でも、リリイは普通の竜とはちよつと違うから。竜であるリムダさんがうちで働いてるつてのに興味を持って、オイラと鍛冶と一緒にやってくれるんだつて。だから風竜王？　とか関係なくて」

「……どうということじゃ？」

いぶかしげに眉をひそめるエステイに、リリイが自ら生い立ちを語った。

話が進むにつれ、エステイの目が見開かれ、セバスチャンさんの顔から表情が抜け落ち、途中で戻ってきたリムダさんの口がボカンと開いた。

元々知っていたのか、興味が無いのか、父ちゃんだけは無表情に、オイラのリュックをあさって清酒の一斗樽を引っ張り出していた。ミミイがお土産にと持たせてくれたものだ。いや、無関心を装っているけど、普段は垂れた耳が今はこちらを向いてピクピクしている。

「ほお、ほおほお。言われてみれば、これは確かに」

リリイの身の上話が終わると、エステイは好奇心丸出しでリリイの周りを歩き舐めるように観察し始めた。口元が楽しそうに吊り上がっている。

「なんともまあ、興味深い存在じゃな」

「竜と人との間の子とは」

硬直から抜け出したセバスチャンさんが、額に手を当て、やれやれと首を振る。

「風竜王も、ようも今まで隠し通したもののよ。これほどの大ごとをお」

父ちゃんは竜たちのパニックを横目に、さっそく清酒を汲み出して、タヌキを相手に愛用のぐい呑みでチビチビ飲み出した。本気でどうでもいいと思っっているのか、自分は関わらないほうがいいと思っっているのか……。耳がこつちを向いているから、多少なりともリリイの安否を気にしているようだ。

「リリイって、大ごとなの？」

尋ねたオイラに、エステイが大きく頷く。

「もちろんじゃ。我もこのような存在は初めて見る。父親が風竜、ということは……ここ五十年ほど幽閉されておるといふ風竜王の弟。科戸と申したか、あれがこの娘の父親であろうの」

「幽閉!？」

びっくりしてリリーのほうを見ると、リリーも初耳だったようだ。

ポツカリと口と目を開いて驚いている。

「さよう。風竜王に次ぐ実力者での、むしろのこと霊獣格の高位竜じゃ。人型になることも出来る。……うむ。この小娘、リリーと申したか？ この娘の存在がなぜ大ごとなのか語るには、まず竜というものについて説明せねばなるまい」

「お嬢さま、それは」

眉間にしわを寄せて、珍しくセバスチャンさんがエステイの言葉を遮る。

「よいではないか。セバス、ノアに聞いたぞ？ 我に無断で、女王竜に関してノアにしゃべったらいいな？」

エステイに扇子で軽く肩を叩かれたセバスチャンさんは、うつと息をのむと、唇を噛んだ。

「ご処分は、いかようにも」

「構わぬ。他ならぬノアじゃからな。我に害となることはすまいよ。だがそこまでしゃべったのじゃ、これから我がしゃべることも、大差あるまい。まして、そのリリーとやらは当事者じゃ」
リリーは何のことかと小首を傾げる。人形というか小動物というか、庇護欲をくすぐる愛らしさ



がある。

「よいか。直々に説明してやるゆえ、耳の穴かっぽじってよく聞け。女王竜が竜種にとっての頂点、これはよいな？」

「うん」

ちよいちよい入る黄表紙^{きびょうし}だか芝居^{しば}だかっぽい言い回しが気になるけど、ここは素直に頷いておく。既知の情報なのか、リリイも頷いていた。

「そこにおるノアは知っておることじゃが、竜というのは女王竜しか産むことが出来ぬ。全ての竜は、女王竜から産まれるのじゃ」

かすかにリリイが息をのんだ。これは知らなかったらしい。

唐突^{どうたつ}だけど、オイラは手を挙げて前から疑問に思ったことを質問してみた。

「はい、エステイ先生、質問」

「なんじゃ」

パシパシと扇子で首の後ろを叩きつつ、初^{はつ}っぱなから話の腰を折られたエステイがオイラを見下ろす。ちよつと不満そうではあるけれど、答えてくれる気はあるようだ。

「さつき、リリイのお父さんが、風竜王の弟^{あに}つて言つてたよね？ リムダさんとラムダさんも兄弟なのは知ってる。でも、みんな女王竜から産まれるなら、全員兄弟なんじゃないの？」

エステイはなるほど、と頷いた。

「ふむ、人からするともつともな疑問よな。そうじゃな、猫で例えると分かりやすいかもしれぬ。

猫は毎年二〜五匹の子猫が産まれるが、兄弟という認識を持つのは、同じ時に同じ腹から産まれた者同士だけ。同じ母親から産まれても、産まれた年が違えば他人と同じ。竜に関しては同じことが言える。女王竜は、通常、一回に五個前後の卵を産む。同時に産まれたものが兄弟。孵化^{ふか}した順に、兄となり弟となるわけじゃな」

「ああ、なるほど、双子^{ふたご}とか五つ子とかだけが兄弟と見なされるのか」

「さよう、さらに言うなら、女王竜が一回の出産で子たちのために使える力はほぼ一定での。兄弟が多いほど力は分散され一個体あたりの力は弱くなり、兄弟が少ないほど一個体あたりの力は強くなる傾向がある。つまり滅多にないことではあるが、産まれた卵が一つだけなら、普通の竜の五倍の力を備えた竜となるわけじゃな」

「へえ。つてことは、きつと最強執事^{セバスチャンさん}竜は一人っ子だったんだろうね」

何気ないオイラの言葉に、セバスチャンさんの表情がビシリと音を立てそうなほど固まった。

「え、なに？ 何かマズいこと言っちゃった？」

おろおろとするオイラに、エステイが苦笑を浮かべる。

「セバスはちよつと特殊での、既存の枠には収まらぬのじゃ。気にするでない。……今、問題となるのは、このリリイとやらが人の腹から産まれておるといふ点じゃ。つまりは、女王竜の呪縛^{じゆばく}からも抜けておるといふこと。リリイの分、風竜女王は、他の女王よりも弱くなったといふことじゃ」

「はい？ どういうこと？ まったく話が見えないんだけど？」

眉根を寄せるオイラに、エステイは扇子を広げると、にまあと笑った。

「言ったであろう？ 我は、神なのじゃ」

02 セバスチャンさんの秘密

「遙かなる昔、最初に一柱の神が産まれ、ついで四柱の神々が産まれた。けれどこの五柱の神々は物を創ることには不向きで、後に産まれた男女二柱の神が万物を産み出した。やがて男女の神は力尽き、創造神のいなくなった世で人間は暴走し、世界をも破壊しそうになり、五柱の神は人間を戒めるために、人と獣をごちゃ混ぜにし、獣人と魔獣を産み出した」

「それは知ってるよ。神産みの神話でしょ？」

お隣のアルファルファ神聖国では違う宗教が信仰されているそうだし、この国にも神社の他にも寺もあるけれど、一般に昔話で聞かされる神話は、エステイが言ったそれだ。

「さよう。その神話のな、二番目に産まれた四柱の神々のうちの二柱が、我なのじゃ」

「はあああ!？」

「と申すか、我のご先祖じゃな。ご先祖は、人への抑えとするため、最強の獣として竜を産み出し、その頂点に君臨したのじゃ。他の風竜、水竜、木竜も同じじゃ」

「土竜は？」

「土竜はちと特殊でな。此度は関係ないゆえ、説明は省く」

あまりのことに、リリイもリムダさんも目を丸くして固まって聞いている。

婆ちゃんたちがいたなら大騒ぎしたんだろうけど、父ちゃんは我関せずといった感じで相変わらずタヌキと一緒に酒を舐めている。耳の先だけはピクピクしているけど、関わるつもりも口を出すつもりもなさそうだ。

「つまりは、女王竜の産卵というのは、スライムの分裂に近いのよ。両性だった原初の神は己の半身を女王竜とし、残りの半身をさらに細かく裂いて雄の竜とした。確かに人格こそは別に存在するが、そもそもは同じもの。竜が死ねば、肉体は死体としてその場に残るが、神の力は女王竜の元に帰ってくる。……そして、いざというときには、女王竜は、全ての竜を吸収することで、原初の神に戻る、と言い伝えられておる」

「ほえー」

あまりに壮大な話に、想像が追いつかない。

時の勇者パーティが総掛かり、または騎士が何百人とかでようやく倒せる竜種。人の生活圏に一頭迷い込んだだけで災害レベルのその竜種を、一万頭以上吸収してなるといふ原初の神。

どれほど大きいのか、強いのか、想像もつかない。そのときに、人間は、世界は、無事でいられるのか？

「それが、さっき言った女王竜の呪縛じゃ。女王竜から産まれた竜は、女王が吸収すると決めれば、本人の意思はどうあれ、魂の根源的なところで決して逆らうことは出来ぬ。なぜならば、女王竜は原初の神の頭脳。竜種一頭一頭は末端のウロコ一枚一枚に過ぎぬのだから。ウロコに意思がある

のかすら、頭は気にせぬじやろう？」

そこまで言って、エステイは目を細めてリリイを見やった。

「じゃがその小娘……リリイは違う。その竜の力は、女王竜の呪縛を抜けた、唯一のものじゃ。リリイが子をもうけずに死ねば、おそらくその力は風竜女王に戻るのであるが、種として繁殖した場合、力はどうなるのであろうな？ 子に伝わり、孫に伝わり、孫の孫に伝わり……そこまで細分化した力を回収することは、到底かなわぬであろう。リリイへと伝わった力の分、おぬしの父——科戸の持つ原初の神の力は少なくなった。科戸を吸収しても、既に子へ流れた力は風竜女王へと戻らぬ。もし、全ての女王が、全ての竜を吸収して争う、などということが起こった場合……リリイに渡った力の分、風竜女王は不利となるであろうな」

「そんな、そんな……」

今までまったく知らなかったのだろう。普段表情の薄いリリイが青ざめている。

「その分では、父親からは何も聞いておらぬとみえるな。無理もない。竜自身にしても、何とはなしに女王竜に逆らえないとは感じていても、詳細を知らぬ者も多い。我が側近であったリムダすらもが初耳らしいしな。それに科戸は、知っておったとしても、おぬしらのために思って言わずに聞いたのかもしれない。つまりは、風竜女王への反逆ととられても申し開きの出来ぬことをしでかしたわけじゃかな」

ミミイから聞かされた内容とのあまりの乖離に、オイラまで呆然とする。当事者のリリイにいたっては尚更だろう。

「ミミイは、竜と人との間に子は出来るのか？ って思いついたララ婆に、物好きな風竜が好奇心で協力した、って言ってたけど……」

「好奇心のお。ほんのいたずら心と、女王竜への反逆罪が釣り合うとも思えぬが。既に幽閉されて五十年。五十年というのは、竜にとっても決して短い時間ではないぞ？」

五十年。五十年前。

「そうだ。ミミイは、十歳の頃まではよくちよく来ていた父親が、ある時を境にぶつとりと来なくなつた、って言ってた……！」

「おそらくその頃、風竜王にバレて幽閉されたのであろうの。今のところ五十年じゃが、このままでは死ぬまで何千年とそのままであろうよ。しかし、瓢箪から駒とはこのことじゃな。あの風竜王の弱みがこんなところに転がつていようとは」

楽しそうに、今まで見たことがないような底意地の悪い表情をするエステイを見て、オイラは思つてもみなかった事実に思い至る。

「……ひよつとして、火竜と風竜って仲悪いの？」

エステイがちよくちよく顔を出すうちにリリイを連れてきたのは、実はかなりマズかった？ 父ちゃんが焦っていたのはそれが理由だったのか。もしこれが原因で、火竜と風竜が戦争になんてなつたら目も当てられない。

「いや？ そんなことは露ほどもない。我と風竜女王とはマブダチというやつじゃぞ。幼いころからの友人での、恋バナとかいうのもする仲じゃ」

「だから、どこでそういう人間の言葉を」

「風竜女王、春嵐は我より年かさじゃが、優しくほんわりした気性でな、今の風竜王、青嵐と結ばれる前は、ちよくちよく相談に乗ってやったものじゃ」

「相談て？」

「春嵐は青嵐と恋仲であったものの、青嵐は風竜の中でも一番の若輩、長老どもはもつと年かさの竜を春嵐の夫にと推しておったのじゃ。そこで我が知恵を授けたのよ」

「どんな？」

嫌な予感がしつつも、一応尋ねると、エステイは胸を張った。

「武闘大会じゃ」

「はい？」

「風竜の中で、春嵐の夫の座をかけた武闘大会を開いたのじゃ。優勝賞品は風竜女王じゃからの、どの竜も必死で、まあ見ものであったわ」

「完全に、趣味だよ、それ。エステイの」

巻き込まれた春嵐さんには同情を禁じ得ない。

「何を言う。春嵐の希望する夫と添い遂げさせるのが第一義じゃ。目一杯協力もしたしな」

「協力？」

うむうむ、と頷くエステイの横から、セバスチャンさんが補足する。

「青嵐様を、鍛えられたのですよ。何しろお嬢さまは当代最強。当時であられましても、次期最強

の呼び声も高く。それはもう、しごきにしごかれて。大会本番には、青嵐様はボロ雑巾のようになっております」

「それでよく優勝出来たね」

「お嬢さまが鍛えられる前とは、別人のようになっておりましたから。ボロボロでも、他の風竜相手にはちょうど良いハンデ、といったほどのもので」

人ごとではない。エステイの毎回の『訓練』を思い出して、オイラは苦笑いする。

「それなのに、あの恩知らずめが。近頃ではめつきり可愛げもなくなつてのお。火竜女王が当代最強なのは、子竜に分け与えるはずの力を保持したままだからだ、卵を産まぬ女王など女王ではない、などどぬかしおる。我とて、……がその気になつてくれさえすれば、卵なんぞ百でも二百でも産んでやろうほかに」

ごによごによとエステイが濁した部分を何ととったのか、セバスチャンさんが意味ありげにこちらを見る。

いやだから。そこはオイラじゃないんだつてば。

「あの生意気で陰険な青嵐めの鼻っ柱を折ってやれるのならば、小娘の一人ごとき、我が縄張り内に住まうことも喜んで許可しようではないか」

「いやだから、うちはエステイの縄張りじゃないんじゃないかと思うんだけど」

「風竜がここを覗くことも、さりげなく妨害してくれよう。風竜の手先が小娘を始末しようとやって来たところで、我が縄張り内で好き勝手などさせぬ。安心して働くが良いぞ。くはは、情報の竜

などといったいい気になっておる青嵐めが、我が手の内に急所を握られるとは『さまあ』じゃの。

『ぎゃふん』という姿が目には浮かぶようじゃわ」

欣喜雀躍といった感じのエステイに、オイラはそつと目をそらす。

まあ、エステイの思惑^{おもわく}がなんであれ、風竜に狙われるかもしれないリリイがエステイの保護下に入ったつてのは、喜ぶべきことなのかな？ うん。風竜王の青嵐さんには、ご愁傷様^{しゆうしょうさま}としか言えないけど。うちがエステイの縄張り扱いは、まあ目をつむろう。

「そういえば、エステイがその時次期最強候補だった……つてことは、当時の当代最強つて、セバスチャンさんだったの？」

話をそらそうとしたオイラに、苦笑いをかみ殺していたセバスチャンさんが首を横に振る。

「いえ、お嬢さまのお母上——先代女王陛下グレンローダ様ですよ」

「へえ、やっぱりエステイの母ちゃんも強かったんだ」

「とてもお強く、愛情豊かで、懐^{ふところ}の深い、素晴らしい女王陛下であられました」

「エステイに似てた？」

「ええ、私めはグレンローダ様のことも幼竜の頃から存じておりますが、お嬢さまは若かりし頃の先代様ととてもよく似ておられます。豪胆で豪勇で豪快で、豪傑^{しやうげつ}にして豪放磊落^{ほうほうらいらく}」

うん、分かる。エステイを表すには「豪」だね。

「セバスチャンさんも敵^{かた}わなかったなんて、むしろくちや強い母ちゃんだったんだね」

豪傑^{しやうげつ}つてくらいだから、セバスチャンさんも振り回されたのかな？

そんな軽い気持ちだったのに、セバスチャンさんの表情が一瞬困ったように揺れた。

「え、あれ、何か違った？」

そこに、エステイの両腕がするりとオイラの首筋に絡み、オイラはエステイの腕の中に閉じ込められた。

「セバスは梓外^{そうがい}じゃからの、女王より強くともカウントされぬのじゃ」

「え？」

頭の上から落ちてきた思いがけないセリフに、思わず視線を行き来させる。

「セバスはの、火竜であつて火竜ではないのじゃ。五指には数えられぬ」

本当は言つて欲しくなかっただろうことを、ペろつとしゃべってしまったらしいエステイに、セバスチャンさんは渋い顔を向ける。それから額に手を当て、少し考えた後、ひとつ頷いて真面目な顔をこちらに向けた。

「そこからは、私がお話ししましょう。以前テリテ殿のお宅で、ノア様に、女王竜の夫はたとえ犬猫でも構わない、と申し上げました。そのとき、ノア様はご自分のことと思われたようでございましたが、そうではないのです。あれは、私めのことなのですよ」

「え？」

目の前の折目正しい執事竜と、犬猫のつながりが分からない。

「私は以前、魔物の領域を漂う、もやもやとした実体のない力の塊だったのです。経験値の塊として、人間や魔獣に狩られるばかりの毎日でした。いよいよ死にかけ、もうすぐ消えるというその時

に、お嬢さまの祖母君、フレイムローダ様に拾っていただき、命を救っていただき、名まで頂戴したのですよ」

「それが、『セバスチャン』？」

「いえ、セバスチャンというのは、お嬢さま——エステイローダ様にお仕えするにあたって名乗っている通り名にすぎません。私の真名は、フレイムローダ様に殉じました。私はただの魔物だったものをフレイムローダ様に拾われ、救われ、名を頂戴し、可愛がっていただき……ついには、火竜としての形と、命を頂いたのです」

「命？」

確かに女王竜っていうのは、神様に匹敵するみたいだけど、命をもらうってのがピンとこない。何かを生み出すってのは、今はもういない創造神って神様にしか出来ないんじゃないかな？

オイラが微妙な顔をしているのが分かったのか、エステイが口を挟んだ。

「女王竜の夫が、犬猫だったとする。そうすると、その夫は女王竜よりかなり早く死ぬな。犬猫は長く生きて二十年。女王竜は他の竜より短命じゃが、それでも千年以上」

その言葉の中に流せないものを聞きとめ、オイラは思わず聞き返した。

「え？ 女王竜って普通の竜より短命なの？」

他ならぬ自分のことだというのに、エステイはどうでもよさそうに説明してくれた。

「卵に力を取られるからじやろうな。じゃが、女王竜の継承は単性生殖。女仙の使う若返りの秘術と大差ない。ノアが心を痛めるほどのこともないぞ。まあ、多少人格は変わるし、記憶も引き継が

れぬが」

「……」

それって、普通に死んで生まれ変わるのと何が違うんだろう。魂は同じだから気にするな、とかそういう？ なんとも言えずに黙るオイラを気にせず、エステイは続ける。

「ノアと我がティマー契約をした折のことを覚えておるか？ 我が、ノアのティマー枠を押し上げたである？ それと同じことが、女王竜の夫へも出来るのよ。具体的には、夫の寿命を、女王竜のほぼ倍、二千年までに引き延ばせる。これは、女王竜が亡くなった後の火竜と若い女王を王配が導く、という意味があるのじやろうな」

エステイが以前に言っていた、『我とつがい、人の理を抜け出せ』というのは、そのことだったのか。例えばオイラがエステイと結婚した場合、オイラの寿命も二千年になる、と。

「え？ あれ？ ってことは、つまり？」

「セバスは、先々代火竜女王フレイムローダの夫。先々代女王は、気が優しく、夫を王とした。つまり、先々代火竜王スウォードが、セバスの正体だ」

03 エステイの告白①

「お嬢さま、その名は……」

セバスチャンさんが、エステイに苦い顔をする。

「そうであつたな、すまぬ。おばあ様に捧げたのであつた。二度とは呼ばぬ」

「え、え、ちよつと待って、つてことは？ セバスチャンさんは、エステイの、じいちゃん!」

混乱しつつも尋ねるオイラに、エステイは頷きつつも否定する。

「人で言うたらそうなるな。しかし女王竜は単性生殖。セバスと我の間に、血のつながりはない」

「セバスチャンさんが、元火竜王……。エステイってば、よくそんな人をあんなにこき使えるね」

「こき使っておるか？」

「偉そうだし」

「偉そうなのではない、偉いのじゃ」

ふん、とエステイが胸を張る。

オイラの頭より高いところで、立派な胸が、たゆんと揺れる。

そういえば父ちゃんは、聞いていないふりをしていたはずが、既にタヌキを抱えてコタツで寝ている。寝たふりかとも思ったけど、耳までくったりしているから本気で寝ているんだろう。

関わっちゃマズイ、という父ちゃんりの防衛本能なのかもしれない。時々足がビクツとするのは、何かうなされてでもいるのだろうか。

リムダさんは何とも言えない表情で、火鉢で鉄瓶に湯を沸かし、お茶を淹れている。さらに白い灰がちになった火鉢を火箸でかき混ぜ、炭の欠片を足す。ただ何もせずに聞いているのはいたたまらないのかもしれない。

リリイは板の間に上がりちよこんと腰掛け、黙って淹れてもらった番茶をすすっていた。

セバスチャンさんがかすかな笑みを浮かべ、自嘲気味に言う。

「ノア様。火竜王の全権は、妻である女王竜が亡くなったときに失われるのです。今の私めはただの火竜もどき。お嬢さまの将来の王配殿下のほうが、よほど大きな権力を有します。私めの前身が何であれ、毛ほども気になさる必要はございません」

なんだか含みのある言葉に、オイラはそつと目をそらす。エステイがオイラを抱え込んだままなのも、セバスチャンさんの誤解を助長してる気がするんだけどなあ。

「あれ？ っていうか、セバスチャンさんって、はぐれ竜だったって前にエステイが言ってたかった？ 火竜王なのにはぐれてたの？」

「さようでございます。ただし、私めがはぐれ竜だったのは、フレイムロード様が亡くなられてから、エステイお嬢さまがお産まれになるまでの間、八百年ほど。傷心の旅というやつですな。火竜の領域を離れておりました」

「八百年？」

確か、女王竜の寿命は千年ほど。竜は、産まれてから百年で成体、エステイが即位して百年だから……？

「お嬢さまの母上、グレンロード様は、歴代になく短命でいらしたのです。豪放磊落な方ではありませんが、とても愛情深く、木竜の夫に先立たれ、気落ちされて……。私が知らせを受けて火竜の領域へ戻ったときには、既に随分と衰弱されておりました。そのグレンロード様は、私の手を取っ

て言われたのです。後を頼みます、お父様、と。それから間もなく、エステイお嬢さまの卵は孵化し、それを見届けられて、グレンローダ様は亡くなられました」

そうか。先代の火竜女王は、セバスチャンさんにとっては娘になる。

血のつながりはないって言ってたけど、娘を看取らなければならなかったセバスチャンさんの思いはいかばかりだっただろう。女王竜のほうが寿命は短いとはいえ、本来だったら王配が娘より長生きすることはないはずなのに。

「……だからセバスチャンさん、あんなにエステイの旦那さんを見つけるのに真剣だったんだ。娘さんに託されたんだもんね。それにひよつとして、この前は百年って言ってたけど、もう二百年、新しい火竜って産まれてない？」

「さようでございます。ご理解いただけたようで、私めも恥を忍んで話させていただいた甲斐がございました。……ですから、一刻も早く、私の目の黒い内に、と」

じいいつ、とセバスチャンさんがオイラを見つめる。

やばい。

やぶをつついて蛇を出してしまった。っていうより自分から蛇の巣穴に突っ込んだ感じだ。

「そ、そういえば、エステイのお父さん、木竜なの？ オイラ、木竜って会ったことないなあ」

「竜にはそれぞれ、特徴があるのじゃ」

話題をそらそうとするオイラに、エステイが乗っかって説明してくれる。エステイも、自分が時いた種とはいえ、セバスチャンさんがオイラを伴侶にと推しているのは本意ではないらしい。

「攻撃特化の火竜。防御特化の土竜。速さと情報特化の風竜。回復と浄化特化の水竜。植物と知識特化の木竜。木竜の大きな特徴としてはな、命を共有する樹があるのじゃ」

「え？」

「木竜は、卵から孵る折りに、一粒の種を持つて産まれるのじゃ。それを、木竜の住まう大樹海へ植える。火竜が火山から力を得るように、木竜は、その樹を通して、植物の力を得るわけじゃな。

木竜は、竜体がどんなに傷つこうと、自分の樹が無傷なら回復出来るが、逆に、自分の樹が枯れてしまうと、竜体が無傷でも、やがて衰弱して死んでしまう。父上はの、その樹がのうなつてしまうのじゃ」

「なんで!? 木竜の領域にある樹なんでしょ？ 人間が間違つて切るとかもないだろうし」

「知らぬ。我が産まれる前のことゆえな」

「そっか、お父さんが亡くなつて、気落ちしたお母さんが衰弱して、エステイの卵を産んで亡くなったんだから……。ん？ って、エステイはお父さんと会ったこともないの？」

「便宜上父上と呼んではおるがな。女王竜の後継に、父は関係ないゆえにのお」

人間なら、父親が亡くなってから子どもを妊娠する、なんてあり得ないことだけれど、竜では普通にあるのか。

「我は父上を知らぬ。母上の顔もろくに覚えてはおらぬ。我はセバスに育てられたのじゃ」なるほど。

エステイの世界はセバスチャンさんに始まりセバスチャンさんに終わる。エステイがセバスチャ

ンさんを好きになったのも、当然なのかもしれない。セバスチャンさん本人は全く気付いてなさそうだけど。

「……それも、もうすぐ終わりでございます」

「へっ!？」

静かなセバスチャンさんの声に、オイラの声が裏返る。静かな中に、背筋がぞわりとするような毛を逆撫でされるような凄みがあったのだ。

エステイの整った眉が、辛そうに歪む。

「お嬢さまはご立派に成長なされた。もはや、口うるさいじいは必要ございませんでしょう。私めがフレイムロード様から頂いた、火竜としての命は二千年。フレイムロード様の夫として千年、グレンロード様のご治世で八百年、エステイお嬢さまがお産まれになってより二百年。私の火竜としての寿命は既に尽きております。今日明日にも、塵芥^{ちりくた}となって霧散^{むさん}してもおかしくはございませんですから、ノア様。私が消えた後、グレンロード様の遺^{のこ}されたお嬢さまを託^{たく}せるお方を、お嬢さまが心許せる相手を、私めは切望しているのでございます」

「な、何もオイラじゃなくても、ほら、同じ竜とか」

エステイを差し置いて勝手にしゃべるわけにはいかないから、名前は出せないけど。ほら、セバスチャンさんとか、セバスチャンさんとか、セバスチャンさんとか……

オイラの目線が激しく二人の間を行き来する。

エステイの意向を考慮しなければ、ラムダさんとかも名乗りを上げそうだし。

「お嬢さまは、当代最強。どのような竜にも後れはとりますまい。お嬢さまのお相手に求めるのは、お嬢さまを守る強さではございません。グレンロード様亡き後お嬢さまの親代わりであつた私めが消えた後の、お嬢さまの心の支えとなつてくださること。お嬢さまが心許せること。心安らげる相手であること、そのみにございます。共に戦うことでも、背を任せられることでもない。私めが、もつともその条件に相応^{ふさわ}しいと愚考^{ぐこう}いたしますのは……ノア様」

「うっ……うううう」

有無^{うむ}を言わせないセバスチャンさんの眼差^{まなざ}しに、思わずオイラはのけぞると、エステイを引く張って家の外へ出る。

今日は満月だ。月の光がとても明るい。

家の中にいるセバスチャンさんに聞こえないよう、結構な距離を取る。

「ちよつとエステイ！ さつきからセバスチャンさん、オイラのことをエステイの伴侶^{はんぶ}っていうか王配候補^{かんぺい}として完璧^{かんぺき}にロックオンしてるよ!? まだセバスチャンさんに何も言っていないの!？」

声を潜めたまま怒鳴る、という器用な真似をしてみたオイラから、エステイは気まずそうに視線を逸らした。

「う、うむ」

「セバスチャンさんの気を引くために、オイラを当て馬^{あてうま}にしてるって言ってたじゃないか。オイラが本命扱いになってたら本末転倒^{ほんまつてんたう}でしょ。今までいったい何してたわけ!？」

「しかし、裸を見せても、膝^{ひざ}に乗ってみても、胸を押すついてもまったく反応ナシなのじゃ。これ

以上、我にどうせよと？」

「竜なんて年がら年中裸じゃないか！ ましてセバスチャンさんにお風呂の介添えまでさせてたよね!? 普段と何が違うっての！ 獣人の男が胸に惹かれるのは哺乳類だからで、卵生の竜には通じないと思うし。いったいどこでそんな知識を……。ちゃんと！ 口に出して！ 伝えるの！」

「こ、言葉にするのか？」

「言わなくても分かる、とか伝わる、とか幻想だから！ セバスチャンさん、もう自分は消える気満々だよ？ 気持ちを伝える前になくなっちゃったらどうするのさ？ ……それとも、一度王配になって火竜の命を授かったら、もう二度目はないとかそういう話？」

さつきセバスチャンさんの話を聞いてから気になっていたことを、さらに声を潜めて尋ねる。

「そんなことはない。私の夫となれば、再び二千年の命は授かる」

こればかりは確信をもって答えるエステイに、一先ずは胸を撫で下ろす。

「良かった。もしそうだったらどうしようかと心配してたんだよ。なら、セバスチャンさんがエステイの王配になるのに問題はないってことだよ。要はエステイが肝を据えるかどうかだけ。躊躇ってる間に、ばあちゃん？ からもらったセバスチャンさんの命が終わっちゃったらどうするのさ」

あまり事態を重く捉えていなそうなエステイが、こともなげに答える。

「おばあ様から与えられた命が尽きても、元の魔物に戻るだけに違いなからう。そうすれば、我が再び名を与え、伴侶とし、火竜としての形を与えてやればよい。そうすれば万事解決じゃ」

ふむふむと頷いているエステイに、オイラはジト目を向ける。

「ひよつとして、エステイ、セバスチャンさんが、自分に逆らえない弱い魔物に戻るの待って、問答無用で従えるつもり？ うわ、最低。自分の気持ちを伝えて拒まれるのが怖いから？ しゃべれもしなくなってから捕まえて逃げられないように縛るの？ そういうの、卑怯者とか臆病者って言わない？ 誇り高い最強の火竜女王が？」

「うっ」

自覚はあったのか、エステイのこめかみに一筋の汗が流れる。

「仮に、エステイの目論見が成功して、セバスチャンさんが、今の形を失って元の魔物に戻ったとしてもだよ？ それって、黒モフみたいなもんだよね？ それに名前を付けて、形を与えて？ どうすんのさ、もっふ、もふーとかしかしゃべんなかったら」

「ううっ」

いつもオイラの首元にいる黒モフと横並びのセバスチャンさんを想像してみたのか、エステイの顔が引きつる。

「それに、火竜の形になれたとしてもだよ？ ひよつとしたら、赤ちゃんからやり直しかもしれないよ？ 昔話の『若返りの水』みたいに、一からセバスチャンさん育て直す？ また百年以上かかるね」

「うううっ」

白い顔に流れる汗の量がじわりと増える。

「そうしたらセバスチャンさんよりエステイのほうが年上だね。今の記憶があるかも分かんないし、年増の母親代わりの女王竜を、好きになってくれるかなあ。ってかエステイ、セバスチャンさんの記憶が残ってた場合、絶対怒られる——どころか、嫌われるよ」

「ううううっ」

火竜という種族は脳筋、根性論の持ち主だが、同時に正々堂々の勝負にこだわり、卑怯なことを嫌う傾向がある。

その誇り高い女王が、姑息な手段を用いて自分を捕らえたと知ったら、セバスチャンさんは、死んでも従わないかもしれない。

何より、そんな後ろ暗い方法じゃなくて、エステイにはエステイらしく胸を張れる方法で伴侶をゲットして欲しいと思う。オイラだってそれなりに、エステイの幸せを願っているのだ。

「それ以前の問題として、本当は分かっているよね？ エステイのばあちゃんがあげた火竜の寿命が尽きたとき、セバスチャンさんが元の魔物に戻るに違いない、つてのが、エステイの希望的観測——そうかもしれない、そうならいい、つて思ってるだけのことで、本当は、本当に消えちゃう可能性がある、つてことくらい」

それまでどちらかというと紅潮していたエステイの顔色が、サァーっと青ざめた。

セバスチャンさんの口ぶりからすると、本当に猶予はなさそうだ。不安に感じつつも目を逸らしていたのだけれど、時間が解決してくれる問題と、時間が経つと取り返しが付かなくなる問題とがある。今回は、間違いない後者だ。

エステイは震える拳を握りしめると……観念したようにふーっと息をついた。

「分かった、我の完敗じゃ。人の身にして火竜女王を負かした栄誉を称え、『火竜女王の祝福』を授け……」

「そんなのはどーでもいいから。善は急げ」

「急がば回れ」

「本当に反省してる？ いい加減にしないとオイラから言っちゃうよ」

さすがにそれは嫌だったのか、エステイが慌ててセバスチャンさん呼びに行く。

オイラは邪魔だろうし、デバガメをやるつもりもないし、「後は若い人たちだけで、ほっほっほ」とか仲人のようなことを言つて去ろうとしたら、エステイに捕まって、不安だから物陰から見えてくれ、とか懇願された。乙女か。

エステイがセバスチャンさん呼び出したのは、裏の荒野だった。

満月の明かりに、一面のススキが銀色にそよいでいてちよっぴり幻想的だ。

ちなみにリリイは、オイラの布団で先に寝てもらった。明日、リリイの布団を損料屋に借りに行こうと思う。ずっというなら、買っちゃったほうがいいかな？

今夜は、オイラがコタツで寝るしかないかなあ。

父ちゃんとタヌキは、もうリムダさんが運んでくれたみたいだし。

オイラがそんなことをつらつらと考えていたのは、セバスチャンさん呼び出したものの、エス

ティが中々言い出せなかったためだ。

普段の戦闘とか女王としての判断はあれほど即決なのに、恋愛となると女々しい……とか言うところ、全国の恋する乙女から石を投げられるだろう。

「……セバス」

躊躇いに躊躇った後、ついにエステイが口を開いた。

それにしてもセバスチャンさん、呼び出されながらもあれだけの時間、当たり前のようにずっと不動で待っているんだから、執事って凄い。

「はい、お嬢さま」

「おぬし、私の命ならなんでも聞くな？」

「さようでございます」

「おぬしに、頼みがあるのじゃ」

「いかようなことでも」

「私の……夫となれ！」

エステイの一世一代の告白に、セバスチャンさんは片眉を上げて冷たく答えた。

「御冗談を」

04 エステイの告白②

「ノア、ノア、ノア！」

ズダダダダッとエステイが涙目で、岩陰に隠れていたオイラのところまで走ってくる。

「ちよ、エステイ、オイラがいるのは内緒のはずじゃ……」

「そのようなことはどうでも良い！ ダメだったではないか！ てんで本気にされていない！」

「頑張つて、エステイ！ セバスチャンさんだって、本当はエステイのことが好きでも、信じられないとか素直になれないだけかもしれないし！」

オイラの励ましに、エステイはゆつくりと拳を握りしめて気合いを入れ、セバスチャンさんのところへ戻っていった。

こっちを見るセバスチャンさんの目が呆れを含んでいる気がするけど、気にしたら負けだ。

「冗談ではない！ 私は本気じゃ、セバス」

「お嬢さまは、ノア様をご伴侶に、とおっしゃっていらしたではありませんか」

全く表情の変わらないセバスチャンさんは、照れ隠しとか、本当はエステイのことが好きな気持ちを抑えている、とかいう風には全く見えない。

ごめんエステイ、勢いで励ましちゃったけど、望み薄かもしれない……

「そつ、そちらのほうで冗談だったのじゃ。我は昔から、セバスのことをつ」
セバスチャンさんの片方の目蓋が、ピクピクと痙攣する。

「ほお。では、私めは、お嬢さまの御冗談を真に受けて、ただの人間に、竜種の秘事を漏らしてしまつた、と」

あれは本気でブチ切れる三秒前——付き合ひの短いオイラがそう分かるんだから、産まれたときからずつと世話になつてきたエステイに分からないはずはない。引きつった顔が、おろおろと言ひ訳を探す。

「ノッ、ノアは特別じゃ。気にしないでよい」

「お嬢さまはことあるごとに、そうおっしゃつておいででしたな。私めはてつきり、ノア様が特別なのは、いずれお嬢さまの伴侶となられる方だからだと思つておりましたが」

「そつ、そうではない。我にとつて真に特別なのはセバスであつて……」

「それでは、秘事を知られてしまつたノア様は、始末せねばなりませぬな」

エステイに顔を向けたまま、爬虫類の視線がチロリとオイラの体表を舐めていく。

ヤバイ。悪寒がする。これ、全力で逃げないと死ぬやつ。なのに足が竦む。

セバスチャンさんで、本気で他の火竜とは格が違う。実はエステイより強いんじゃないだろうか。涙目でふるふる尻尾を股に挟んだオイラを庇うように、エステイが両腕を大きく広げて立ち塞がつてくれた。

「ノアは、わつ、我の友達じゃ」

「ご友人であろうと、告げてはならぬこともございます。それに、特別だとおっしゃっていたではありませんか」

「ノアが、何故特別なのかは、今は説明出来ぬ。我を信じ、深く聞くでない」

「伴侶に、と望まれる私めにも、お教えいただけないことがおありになる、と」

氷点下以下の冷たいセバスチャンさんの物言ひに、半泣きになつたエステイが再びオイラのところに走ってくる。

さつき庇つてくれた勇姿はどうした。オイラを盾にされても、あれは無理だつて。

説得出来るとしたら、セバスチャンさんが何より大事にしているエステイを置いて他にない。

「ノア、ノア、ノア！ もう我はくじけそうじゃ」

「諦めないでよ！ ここでくじけちゃつたら、エステイもオイラももう後はないよ！ セバスチャンさん、八つ当たりで王都の半分くらいは壊滅させそうな極悪面してるし。エステイだつて下っ端に交じつて一から叩き直しかやられるよ、きつと」

オイラの脅しに、エステイは両頬をバチンバチンと叩いて気合いを入れ直す。

そのまま戦いに赴くかのようにセバスチャンさんのほうへ向かった。

「セツ、セバスは、おばあ様から頂いた命が尽きそうだ、と申しておつたが、我の夫となれば、再び二千年の寿命が得られる」

別方向からの説得に、セバスチャンさんの頬がほんのちよつぴり緩む。

「もうじき消えゆく私めへの、お情けでおっしゃつてくださったのですか。ああ、さすがは私

めが手塩にかけてお育てしたお嬢さま。なんとも慈悲深い。しかしながら、ご心配いただくずとも、私めはもう充分に生きました。思い残すことは、そう、お嬢さまのご伴侶だけ」

そう言つて、セバスチャンさんが陰のある視線をオイラへ向ける。伴侶候補として目をかけていたオイラが、エステイと一緒になつて悪ふざけをしている——と、セバスチャンさんには見えてくるのだろう。

悪ふざけでなかったらなお悪い、お前のやるべきはお嬢さまをけしかけることではなく、宥め諫めることだろう、と……セバスチャンさんの無言の圧力を感じる。

でも、オイラじゃダメだ。エステイが望んでいるのは、オイラじゃない。

「そうではない。我が、セバスに消えて欲しくはないのだ。消えるでない、セバス。我はもつとそなたといたいのだ。我の命ならば、なんでも聞くと申したであろ？」

必死さの滲むエステイの言葉に、セバスチャンさんは様々な感情を押し込めたような表情で一度ゆつくりと目を瞑り——それから開いた瞳には、もはや感情の揺らめきはなかった。

「私は、フレイムローダ様に忠誠を誓いました。お嬢さまにはございません」

「わつ、我に捧げる忠誠はないと申すか」

エステイが、涙目でふるふると震えている。

握りしめた拳からは、爪が食い込んで血がにじんでいる。

エステイはそのまま再びオイラのところににじり寄ると、鼻をすすりあげた。

「ノア、ノア！ あんなことを言いおるぞ！ 我はどうすればよいのじゃ」

前掛けのポケットに入っていた手ぬぐいで、エステイの鼻水をちーんとかんでやる。

こつちをじいっと見つめているセバスチャンさんの目は怖いけど、オイラだってエステイの幸せを願つてゐるんだ。震えそうになる足も、股に挟まったしっぽも、気付かないふりをする。

一番大事なのは、エステイがちゃんと気持ちを伝えられることだ。

セバスチャンさんは、エステイのかけがえのない家族。伝えられないまま家族がいなくなつてしまつたら、きっと物凄く後悔する。オイラに向けられるセバスチャンさんの殺気なんて、気のせい気のせい。

「大丈夫だよ、落ち着いて。自分の気持ちを、素直にぶつけて」

意識して冷静な声を出す。

「よし」

気合いを入れ直したエステイが、右の拳を左手のひらにバシバシとぶつける。

セバスチャンさんへと向かうエステイを見送り、冷や汗を手ぬぐいで拭おうとして、エステイの鼻水がついていることを思い出し、前掛けにしまい直す。

そんなオイラが再び前を向くと、エステイがセバスチャンさんをまっすぐ見つめていた。

「我は、セバスのことを、すつ、す、好いておるのじゃ。我は、我の認めた者としかつがいたくはない」

セバスチャンさんが、冷たい目つきをさらに細める。

「ですからそれはノア様でございましょう？ 消えゆくこの身を惜しんでくださるのは嬉しゅうござ

ざいますが、ただ一人のお嬢さまの夫の座を犠牲にしてまで、このような老骨になどこだわる必要はございません」

「どう申せば分かるのじゃ。我はセバスを失いたくはない。我が幼童の頃より、長老共の認める最強はセバスただ一人。奴らの認める我が伴侶もまた、おぬしを置いて他にない」

「老害どものたわごとなど、お嬢さまがお気になさる必要はございません。確かに、ノア様は彼らに遠く及ばないでしょうが、それは未熟によるもの。あと千年もすれば、今の長老たちにも比肩しましょう」

必死で理屈をひねり出すエステイに、無表情にその築き上げた山を突き崩していくセバスチャンさん。

エステイの顔が次第に紅潮していく。まあ、元々理詰めで考えるタイプじゃないしなあ。

「そんなことはどうでもよいのじゃ！ なぜ分からぬ！」

「何をおっしゃっておりますのやら。いつまでも幼童のように駄々をこねられて。お嬢さまも、そろそろじじ離れなさってください。そもそも私はお嬢さまの祖父。いくら血のつながりがないとはいえ、お嬢さまの伴侶にはなり得ません」

静かに。

けれどとりつく島もなく断言しきったセバスチャンさんに、エステイが音もなく号泣する。

変な言い回しだけれど、そうとしか言いようがなかった。

エステイの両目から、とめどもなく涙があふれる。

火竜の涙も、透明なんだと。場違いに、オイラはそんなことを考えていた。

エステイの悲嘆、セバスチャンさんからオイラに向けられる怒りと殺気、それに当てられて虫の声ひとつしない静まりかえったススキ野原。

月明かりに照らされて、それはとても恐ろしく——また、美しい光景だった。

「ノア、ノア。やはり……やはりダメだったようじゃ。こう言われることが分かっておって……こう言われることが怖くて。百年もの間、言い出すことが出来ずにおったが……やはり、のお。セバスにとって、我は大恩あるおばあ様の孫でしかないのじゃ。おぬしに励まされて、セバスがセバスであるうちに、と思うたが……」

力なくオイラにすがり、嗚咽を漏らし始めたエステイの背後に遠く、セバスチャンさんの影が見える。

なぜかそれは、とても寂しそうで。

孤独の闇に揺れていた。

「やはり、お嬢さまは、いざというときにはノア様を頼られる。お嬢さまが心許されるのはノア様だけ。こんな老いさらばえた化石より、どれほどふさわしいことか。ノア様。重ねてお願い申し上げます。お嬢さまを、どうか、どうか……」

フツ、とオイラに向けられていた負の感情が霧散した。躊躇いがちに、リ、リーンと虫の聲が戻ってくる。

薄く。

セバスチャンさんの影が、滲んだような気がした。
存在が。

周囲の魔素に、溶けてゆく。

これは。これはこれはこれは。

全身の毛が逆立つ。これはマズイ。よりによって、なんでエステイが腑抜けてるこのタイミングで。

「エステイ！」

まだ泣き呆ほうけているエステイの胸ぐらを掴み、オイラは叫んだ。

「セバスチャンさんの名前は!? 考えてたんだろ!? エステイのばあちゃんが名付けたのとは別の、エステイだけの、セバスチャンさんの名前！」

「そ、それはむろん……」

まだ状況が分かっていないのか、エステイがギクシャクと頷く。いつものエステイなら、こんなに察しが悪くない。精神的に参ってる。

「呼べ！ 呼ぶんだ、今！」

「な、なにを」

「早く！ 今引き戻さないと、セバスチャンさんが！」

オイラが指さすほうを見やったエステイが大きく目を見開き……全てを、理解したのだろう。絶望に表情が凍り付き、両の頬が引きつる。

「ま、まさか。消えるというのか？ セバスが？ 今？ 我を置いて？」

家族との別離。どれだけ手を尽くしても、すり抜けてしまうこともある。覚悟を重ねても重ねても、耐えられずに壊れてしまうことも。失ってから、どれだけ後悔しても遅い。

もう、オイラの中から大分薄れてしまった母ちゃんの笑顔もそうだ。そのうち、完全に忘れてしまふ日が来るのかもしれない。

でも、エステイはまだ、手を伸ばせば間に合う。名付けられ夫になったことで救われた、というセバスチャンさんの体験談に基づくなら……

「早く！ 早くしないと、もう永遠に……」

会えなくなる……

オイラがそう続けるより早く。エステイの瞳に、炎が宿った。

それは、戦いに赴おもむく女王の気炎。

「クラウン……クラウンローダ!! 我が夫よ！ 勝手に消えるなど、誰が許した!? 火竜である限り、その身、その魂までもが我のもの。疾とく来て我が前に跪ひざまずけ！」

エステイの、凛とした声が響いた。

そこには、躊躇ためらいも何も存在しない。

あれだけ、セバスチャンさんに振られたらどうしようとか、弱い魔獣に戻ってから口説けばいいじゃないかとか、ぐだぐだ悩み迷っていたのが嘘のように。

それでこそエステイ。当代最強の火竜女王。見とれるほどに美しい、毅然きぜんとした横顔。オイラが

一番好きな、肝を据えたエステイの顔だ。
次の瞬間、エステイが炎に包まれた。

そしてエステイからセバスチャンさんに向かって、一直線に炎の帯が伸びる。
エステイのセバスチャンさんへの想いを表すかのように、灼熱の、紅蓮の炎。
霧散しかけていた存在が、一気に収束する。

一瞬、一抱えほどの光の塊になったものが、次第に形作られていく。

そのまま、赤い光に包まれて、人型だったセバスチャンさんは、巨大な火竜の姿へと変わった。
火竜にしては黒みを帯びたウロコが艶やかに光る。

ほんの少し、若返ってさえるような？

『お嬢さま……。なんといいことを』

巨大な火竜が、首をふりつつ頭をおさえる。痛恨の極み、とても言いたげなその声は、セバスチャンさんにはあり得ないほど、様々な感情に揺れていた。

『こんな老躯を引き留めるために、ただ一度の伴侶の誓いを成されるとは……。もはや、もはややり直しは出来ぬのですぞ。この力を私めに使ってしまったということは、お嬢さまが伴侶にと望まれたノア様は、高々百年もせぬ内に老いさらばえ、お嬢さまを置いて逝かれることになる。王配を亡くされたグレンロード様の嘆きを――身を損なうような悲哀を、お嬢さまはご覧にならなかったから分かります。まさか私なぞのせいで、お嬢さまに味わわせることになるうとは』

竜体でも分かるほど辛そうに顔を歪めるセバスチャンさんへ、エステイが鼻息も荒く牙を剥いた。

「何度言わせる気じゃ！ ノアは友だと言っておろう！ 死に別れたところで、私の寿命など縮みはせぬわ！ 我が好いておるのは、おぬしじゃセバス……。いやクラウン！ まったく、しおらしくおぬしを口説こうなどと我もどうかしておったわ。我は火竜女王。望みは実力で叶えるが火竜の流儀。私の夫はおぬしじゃ、異論は認めぬ」

『されど、お嬢さま……。』

さらにセバスチャンさんが言い募ろうとした瞬間。

「ぐどい！」

エステイの手に、扇子がひらめいた。

次の瞬間、それは長大なパルチザンへと変わり、それを腰だめにしたエステイが、苦悩に身を丸める老火竜へと躍りかかる。

「えっ!? エステイ!? 何すんの!？」

ギャギイイツツと耳障りな音を立てて、身をひねったセバスチャンさんのウロコの上を『金鳥』の刃が滑る。衝撃に割れたウロコが数枚、ボタボタと落ちた。

まともに受けければ、おそらくセバスチャンさんのウロコをしても、『金鳥』に切り裂かれ、貫かれただろう。それを咄嗟に身をひねって受け流したセバスチャンさんもさすがだったが、その隙に死角へと回り込んだエステイが、巨大な火竜の体へと足払いをかけた。

オイラには逆立ちしたって出来ない技だけれど、人型になったところでエステイのバカ力は竜形体と遜色ない。

「ごお、と音を立てて、巨大な火竜の体が横倒しになる。とっさに跳ね起きようとしたセバスチャンさんの喉元のどもとに、『金鳥ジンウ』の刃が突き付けられていた。

「エステイ！」

横倒しになったセバスチャンさんの肩口に立ち、顎あごに足をかけたエステイが、セバスチャンさんの首へと『金鳥ジンウ』を振り下ろす。

思わず片目をつぶって顔をしかめたオイラの耳に、ギャリンツと嫌な音が届いた。

05 エステイの告白③

「ふふ、ふははっ」

喉元を切り裂かれたセバスチャンさんの赤黒いウロコに、鮮やかな紅い血が流れる。

首の三分の一ほどを切り裂かれながらも、さすがは火竜というか、セバスチャンさんは取り乱すでもなく意識もはっきりしているようで、かすかに顔をしかめている。

ぶしやりと噴き出た血潮ちしほを片手で押さえ、喉の奥で低く唸うなって鼻にしわを寄せ、エステイの真意を問うようにその返り血に濡れた姿を見つめていた。

「エ、エステイ？　なんで……セバスチャンさんに攻撃なんて」

フラれ続けて、どうかしちゃったのかと心配するオイラには目もくれずに、エステイはヒラリと

セバスチャンさんから飛び降りると、何事もなかったかのように平然と言った。

「何をしておる。とつとと治癒ちゆせんか」

『……』

セバスチャンさんは体を起こし、治癒の魔法が何かを使ったのか、傷口が淡い水色に輝き、次第に傷がふさがっていく。

リムダさんが火竜で唯一の治癒魔法の使い手だったはずんだけど、まあ、セバスチャンさんだしなあ。どんなあり得ないことをやっても「セバスチャンさんだし」で済む気がする。

ってか、エステイが何を考えてたのかは分からないけど、人間だったら確実に致命傷ちめいしょうレベルだと思っただよ、これ。

「我は強くなった。我はもう、じいやが必要な幼竜ではない」

返り血に濡れた髪を掻き上げ、エステイは威風堂々と老火竜を睥睨へいげいした。

「おぬしが言ったのであろう。もはや我に守りは必要ないと。立派な女王になったと。それなのに おぬしは、いつまでもじいに甘えたいからと、公私を混同し、唯一無二の王配への権限を私みたくししたのだと、女王たる我を侮あなづったな。その無礼、万死に値する。誅殺ちゅうさつされるのも当然のことと心得よ」

驚きに目を見張ったセバスチャンさんの視線が、徐々に下を向く。

キツク噛みしめた牙が丈夫な火竜のウロコを砕き、治癒魔法をかけていたはずの手が力なく垂れた。治りきっていない傷口からは、未だにじくじくと血が流れている。

『早くに母君を亡くされ、後ろ盾を亡くされたお嬢さまを、誰にも侮られぬようお育てしたはずな